

再論 Pidgin English——周振鶴氏への回答

内田慶市

0. はじめに

異文化・異言語の接触によって起こる現象には様々なものが考えられるが、特に次の二つは避けて通れないものである。

- (1) 「彼の国」の言語と「此の国」の言語の交通
- (2) 新しい事物に対する新しい「表現」法の確立

(1) を可能とするには、「彼の国」の言語の習得、あるいはその媒介者としての「通事」が必要となってくるし、(2) の具体的な現れとして、「外来語」「新語」が誕生することとなる。

ところで、「彼の国」の言語の習得にはこれまた多くの方法が考えられるが、近代の東西言語接触の場面においては、大きく次の二つの方法が存在していた。

- (a) 宣教師に代表される言語学的、科学的、体系的な教学方法
- (b) 「廣東英語」(廣東)や「露天通事」(上海)に代表される「民間療法的」教学方法

また、「彼の国」の言語を学習する場合、「此の国」の言語の文法や語彙の違いもさることながら、「音」をいかに記述し、それをいかに「つかみ取る」かは極めて大きな課題であったはずである。とりわけ、東と西のように、表音文字と表意文字という全く違った文字体系を持つ言語同士がぶつかり合う時、彼らは「音の記述」に相当な苦勞を費やしたはずである。

日本の場合は幸い、「カタカナ」という一種の表音文字が存在していたため、それが十分に活用されることになる(ヨーロッパ語の学習のみならず、中国語の学習においても、江戸時代の「唐話」以降現在までカタカナによる表音は利用されている)が、中国の場合は、あくまでも

漢字を使用する以外には方法はなかった。現在ではアルファベットも使用されるが、それでも、Januaryを「吉尼奧日」として記述する方法は根強く残っている。

さて、この(b)の場合に、実はもう一つ興味深い現象が生じてくる。それは、「第三の言語」の出現=Jargon, Pidgin, Creoleである。

この、Jargon, Pidgin, Creoleについては、たとえば、身近にある辞書などでは以下のような説明がみられる。

Jargon:

words and expression that are used mainly by people who belong to the same professional group, and that are difficult for others to understand. (Longman)

Pidgin:

A language that is a mixture of two other languages and is used especially between people who do not speak each other's languages well. (Longman)

Creole:

A language that is a combination of a European language and one or more other languages. (Longman)

簡単に言えば、JargonはPidginのより初歩的、簡素化されたものであり、CreoleはPidginよりも広範囲に、しかも一定程度の規範性、通用性を持った「混合語」ということができるだろう。

JargonやPidginについてより詳しく取り上げたものとしては、以下のような、Williams (1836)やW.C.Hunter (1882)のものがある。

W.C.Hunter, 1882: *'FAN KWAE' at Canton*

Pigeon-English is the well-known name given to that unique language through the medium of which business was transacted and all intercourse exclusively carried on between the 'Western Ocean' foreigner and Canton Chinese. (60p)

On the other hand, the shrewd Chinaman succeeded in supplying this absence of the

knowledge of his own language by cleverly making himself familiar with sounds of foreign word, and conforming them to his own monosyllabic mode of expression, at the same time using simple Chinese words to express their meaning. He thus created a language, as it may be called, deprived of syntax, without the logic of speech, and reduced to its most simple elements. (p.61)

Williams 1836 “Jargon spoken at Canton: how it originated and has grown into use; mode in which the Chinese learn English; examples of the language in common use between foreigners and Chinese” (*Chinese Repository*; pp.428-435)

Thus they do by staying in honges, shops, and other places where foreigners resort, and are soon able to express their ideas in the jargon called Canton-English.

また、最近のものとしては、吳义雄 2001. “广州英语”与 19 世纪中叶以前的中西交往《近代史研究》があり、ここでは、Pidgin あるいは「廣東英語」の歴史的変遷やその典型的なテキストである『紅毛通用雑話』等について詳しく述べられている。

1. Pidgin English の定義

さて、内田 2005¹においては Pidgin English について以下のように定義しておいた。

「言語接触」により誕生する、「限られた語彙・音韻」と母国語の文法に影響された、相手側の言語の規範的な文法・構文を単純化したもの (p.95)

また、その具体的なものとしては、以下のようなものを挙げておいた。

Velly well.

Chin-chin, how you do? Long time no hab see you.

What thing wantchee?

Just now no got. I think Canton hab got velly few that sutemeet.

Two time before my com, no hab see he. (Williams 1836)

I no see you.

¹ 内田慶市：十九世紀の英語資料と汉语研究——以筆者发现的《华英通语》的新版本为主，《或问》第九号 2005：93-101

You want how much.

You go what time.

Have understand.

No can inter city.

Tomorrow no have time. (『英話註解』)

なお、Charles G. Leland: *Pidgin English Sing-Song* (1876) は Pidgin ばかりを集めたものであり、Giles 1900. *Glossary reference on Far East*. などにも幾つかの典型的な Pidgin の例が収められている。

一方、周振鶴氏や游汝杰氏、呉義雄氏などは、以下のようなものも Pidgin English としてきた。

康姆 (come) 谷 (go) 也司 (yes) 雪堂雪堂 (sit down sit down) 发茶 (father) 卖茶 (mother)

周・游『方言与中国文化』1986

温 (one) 都 (two) 地理 (three) 科 (four) 法士ト (first book) 昔近ト (second book)

『紅毛通用雑話』、『循環日報』の広告

些林 (sell) 哗时 (wash) 薛当 (sit down) 士猎 (sleep) 论 (run) 士羊厘 (smell) 喇

治 (large) 叭咧 (bread) 多时 (toast) 卑士结 (biscuit) 边臣 (pencil)

『大英俗語抄本』

これに対して、筆者はこれらを全て Pidgin English とすることは、「音注」あるいは「音訳(語)」と Pidgin English との違いが不明確になるとして、そのような単語レベルでのものは「音注」あるいは「音訳語」として処理するべきではないかという意見を提出しておいた。つまり、「あくまでも実際の英語表現(文単位、あるいは発話)における非規範的なもの」に限定すべきだというのが筆者の基本的な考え方である。

2. 周振鶴氏の意見と筆者の立場

このような上記の筆者の意見に対して、周振鶴氏は「如何认定 pidgin English」(本号所収)の中で以下のような考えを示された。

- (1) 文法上だけでなく、語彙用法(詞法)の面でも Pidgin か否かを弁別できる
- (2) 語音の面でも正規の英語の音訳と Pidgin には区別がある
- (3) Pidgin とする漢字注音は全てが音訳ではない

- (4) Pidgin の基本はそれをを用いて話すことであり、それを書くことではない。早期の中国式 Pidgin 教材は漢字で書かれたのであり、『英話注解』のようなものは、すでに英語が分かる人によって書かれたものであるから、Pidgin も英語の単語を使って書かれたのである。非母国語を聞くとき、最も肝心なのは「キーワード」であり、文法ではない、これこそが Pidgin に最も大きな特徴である

この意見に対しては、筆者も納得できる点が多い。特に、(4) についてはほぼ意見を同じくする。

ただし、(1) ~ (3) については若干意見を異にする。

まず (1) であるが、氏は「詞法」においても正規表現と Pidgin が区別できるとし、その例として、形容詞の比較級を挙げている。それは、『英語集全』(唐廷枢、1862) の記述を元にする。

廣東番語亦有三等之分，但更字俱說麼字，至字俱說稔巴溫，則如長字說郎，更長說麼郎，至長說稔巴溫郎，短字說失，更短說麼失，至短說稔巴溫失，如此之分，今番人亦有多曉(卷四，12a，眉批)

周氏はこれを「詞法」の問題とするが、実はこれも「文法」の問題である。つまり、中国語に引きずられた誤った用法であり、先に挙げた『英話注解』の Pidgin と変わりはない²。

(2) と (3) については、確かに、『英語集全』では、「廣東番語」(=Pidgin English) とそうでない発音表記の違いは見られる。

たとえば、『英語集全』では以下のような記述があちこちに見られる。

五 five 快乎 廣東番語說輝
 七 seven 些墳 廣東番語說心
 九 nine 乃吾 廣東番語說坭
 一半 one half 溫蝦乎 廣東番語說溫哈
 様子 shape 涉 廣東番話花臣
 別個 other 極打 廣東番話拿打

² このような比較級を中国式の「更」「至(現代語的に言えば「最」)」で表すのは、屈折語と孤立語の問題として考える見方も当然存在する。その場合は確かに「詞法」の問題であるとしてもいいのかも知れないが、筆者はこれはあくまでも Syntax の問題であると考えている。

要 want 灣地 廣東番話灣治

(書脚所註俱是廣東番話)

呢的係乜野 What is that. 喝衣士撻 喝丁

我有事 I am busy. 挨厭卑西 挨合吉卑剪

これらを周氏は、正規英語の発音表記＝「音訳」と Pidgin の発音表記の違い、つまり、前者は正式な読音（“拼读”）であり、後者は「簡素化された大体の音（“簡省的大致模倣”）であるという。ただ、これはほぼ当たっているが、shape では逆に後者が複雑（単音節から二音節）になっているし、want などの「地」と「治」にそれほど大きな違いがあるとは思われない。

また、周氏は多くの語尾に -ll をもつ単語には、-um をもつ漢字を用いて表すのが Pidgin の発音表記の特徴だとして、たとえば、call は正規の表記は「哥厘」に対し、Pidgin では「歌林 (lum)」であるし、kill は「驢厘」に対して「其林」となるという。筆者の挙げた「些林」も同様とする。

これも妥当な見方ではあるが、しかしながら、周氏も自ら言われているように、どちらにしても、「正確な発音」を表すことはできないことには変わりはない。漢字で英語の音を表すには自ずと限界があるのである。それは日本の場合でも同様であり、「バイオリン」と表記しても「ヴァイオリン」と表記しても大差はなく、英語の音を全くそのままには再現できないのである。

たとえ、「廣東番話（語）」と「正規の音の漢字表記」との違いがあることは承知しても、その対応が全ての単語やフレーズ、文にないのはどういうことなのか。

実は日本の場合も、「カタカナ語」はピジンかという問題が存在する。

サイダー、コーヒー、サンドイッチ、……

これも、「それが実際の口頭で使われたりした場合には、ピジンと言ってもいいし、それは、We will make drama. とか Don't mind と同じ扱いを受ける、ただし、単語レベルでのカタカナ表記はそうではない」というのが私の基本的な立場である。

同じく「ピジン・イングリッシュ」という場合は、あくまでも「英語」として表現されたものであって、漢字で書かれたものは英語ではない。もちろん、以下のような漢字でもって英語を表す場合は、ピジンに入れることになる。

生发油买来卖去 Thank you very much.

雪堂雪堂 sit down sit down.

3. Pidgin Chinese あるいは 洋泾浜协和語

最後に、若干の余談であり、また、日本の「負の遺産」ではあるが、これなども Pidgin とし

でも考えられる例を以下に示しておく。

我的这个, 我的进上 (おまえこれを私にくれ)

我的饭饭 (米西米西) 干活计 (私は飯を食う)

你的慢慢的 (おまえ待ってろ)

你的快快的走不行 (おまえ速く走らにゃなプシンじゃないか)

你的这个干活计不行, 脑天坏了 (おまえこんなことをしてはいかん、馬鹿者)

饭饭 (米西米西) 进上 (飯をくれ)

これは『中国語と近代日本』(安藤彦太郎, 岩波書店 1988) に取り上げられているいわゆる「兵隊支那語」「沿線中国語」といわれるものである。中国のその時代を題材にした小説にはこのような「けったいな中国語」が時折登場してくる。とりわけ「的」をやたらと使うのが特徴である。

また、同じく中国の東北部では現在でも以下のような「日本式中国語」すなわち、動詞と目的語が逆転した「非規範的中国語」が存在するという。まさに、Pidgin Chinese である。

优秀大型货物船热田山丸大连着

日小铁工业满洲移驻

日郵便业务协定修正 (游汝杰《中国文化语言学引论》1993, p.66)

付記 I: 本稿は、アジア文化交流研究センター「言語文化研究班」第4回研究例会 (2005.11.18, 関西大学東西学術研究所) での口頭発表を元に稿を起こしたものである。

付記 II: 本稿は、平成 17 年度日本学術振興会基盤研究 (A) (一般)「中国文化の伝播、変容と環流——中国沿海地域と日本」(研究代表者: 藤田高夫) による研究成果の一部である。